

きさては心懸等も自から改め、父母師匠たる聖祖の御名に汚れをかけ申さぬやう致さねばありません私共たろそかぢ者は御恩や御慈悲を蒙つて居りますと、初めは其の御慈恩に感激して一心に御報恩の御任致しますが、爛れるに従ひ月日のたつと俱に何時しか例の我が儘勝手が起つて参り、遂には小言を言つたり屁理屈を並べて不平など洩したりするやうになります、情の篤い人で母親などゝ口諍ひする者があるのもつまり親の恩に爛れるので其の根元を質せば依然孝養の念は變らぬのです、されば私共はこの御高恩が大に身に感じ深く泌み迄んだからには月日が経過ばとて決して御恩に爛れて疎情に思つてはありません、益々御給仕の志を勵し御恩の爲め身を粉にして働かねば濟みませぬ、そして朝に夕に聖祖の前に罷出で自分が慾心の深い凡夫である事其凡夫が大慈悲の御力で救はれる、従つて聖祖の手に救はれた輕からぬ身であるからには佛子としての務をなさねばならぬ事等を心の底から申し陳べて少しも詐り飾ること

なく、日々の不如法的事々も併せて懺悔し、仰いで聖祖の御姿を拜しましたらば其の時の私共の心の嬉しさは何んとも譬へ様はありません、此の清らかあ美しい心を常に持つと何處に身體は居ても私共の眼にアツく御姿を拜する事が出来て聖祖の御前に參たと同様な思が致します、理屈や種々の法門談義を學んで身に守るよりいと容易い所の妙法五時の御題目を唱へ御聖祖の前にゐるといふ決心が第一であります、それさへ忘れねば何事も怖ることなくまた自ら他に迷はされたり慾に心が動く様な事は決してありません、何時も聖祖の御前に居る事を忘れてはそれが墮落の根元であると堅く信ずべきであります。南無妙法蓮華經！

我は本化の門下也

江 原 一 夫

靜肅ある或夜、書齋に獨り祖傳を繙くの時、法の響と云ふか天地の聲と云はふか、吾が胸奥深く

傳ふるあり、目を閉じ心を沈めて靜かに聞けば、いとも妙なる調べ高く低く將た又細く、法界の私語宇宙の聲、有情非情草木國土に至るまで、成佛せしむるの眞理を、一言に云ひ現したる妙法の温かき梵音、よく聞けば、一佛乘をたぐる信浮の友の唱題の聲、奥ゆかしき法鼓と調和して、幽谷を訪づる響きあり。此の靜閑なる折しも、豁然として吾を激する在り、知らず沈思默座せば、今更の如く、何故にかゝる偉大ある英僧、具つ大和民國の大導師、いや總ての日本人民中吾等が最も信賴す可き、日蓮大聖人の一分子たるの、忝けなきを得たりしか、同時に宗祖の佛陀の金言、我不愛身命但惜無上道現身に、來らせ給ひ、長くも無き、六十有餘年の御生涯を、只一日の如く、末法の暗を照す可く、否後世の吾等の爲めに、至誠の安慰を與へしめんと、御誓願の下には、遠離於塔寺波加刀杖者の諸難を鴻毛の輕きに比し給ひ、波荒き伊東が海角に、可惜尊き罪なき御身の流罪の止むなきに至り給ひし時等、或ひは寒氣激しき

日本洋上の孤島、佐渡に流難に遭遇遊ばされ給ひし時、將た七里が濱邊瀧口の渚に、正に一陣の塵と果てなんぞせられし時の如き、噫偉太なる哉『妻子所領眷屬の爲めに、身を失ひし者多し、然れども法華經の御爲めに、身を捨つるものなし、只日蓮一人なり』と叫ばせ給ひ、勇姿泰然自若として自からかゝる迫害の、佛陀の記文に當れるを、無上の悦と轉じて終生送くり給へる、其の献身的偉大なる御精神に、謝し奉るゝもに、吾は『日蓮聖人が愛子なり。』吾は『佛陀の聖子あり。』との自覺沸然として起り、夜半孤影寥しく、思を遠き六百有餘年の昔に致しては、多々益々、感慨無量、己の過去幾年他事に過ぎ來たりし事の愚かさ、いざ起らん、奮はん、自覺せん、この感難然として激し來り、果ては此の微弱なる五尺の身心、一躍しては宇宙法界の主權者にてもあるらんかと、目覺めたり。噫かくて宗祖の出家の立志たるや偉然たり。時しも大聖人謂らく『吾今父母を離れて出家せんは安逸を得んが爲めには非らず、一編に佛智を求

めて、迷の衆生を救はんか爲めなり』と。少にしても已に斯の如き、『吾は末法の大導師とならん、吾は日本の大船とならん。』てふの大自覺を抱き玉へるなり。吾出家以來日尙淺く、研學未だ微薄なりと雖も、過ぎにし幾年春暮正に開けんとして二三の草客美花を伴ひ來たりし頃『吾は日蓮大聖人の御弟子とならん』吾は信を探りて人生の眞義安心立命の境に入り飽までも活躍せん』との一朝の覺悟の下に、一家團圓の綱を破し、山寺の窓に佛書を繙くの身とあり、然して今や祖山が峯にかくも尊ぶべき聖教をたぐるを得たりしなり。さらば、吾等は如何でか宗祖のあの光彩ある且は妙なる御生涯を六百有餘年以前の出來事として、只驚異の目を見張りつゝ過ぐす事の出來得べき。飽までも献

必的宗祖の爲めに、否佛陀の爲めに奉仕して、常在此説法の御記文を念頭に抱き、大上人を此の現身に來たらし、日々夜々に於て吾孤身に活けるに非らず、吾は大上人とゝもに活けるあり、この大信仰を保ち、天地に恥ぢるかく心明正大第二の宗

敎家たる吾等の本務を全うし、過去六百有餘年の大上人の生涯を、此の現生活に輝かせて、大上人の末法々々々と叫び給ひし、今世を大聖人の御精神の如く、向上さす可く、一大奮闘を試みざる可からず。

人生と勞働

辻 芦 洲

働け額の汗と壯者の日に焼るけた筋肉とは、惡魔を驅逐するの最良の神符なり。

人生此の世に於ける生涯は、大部分勞働の生涯と稱すべきなり。仕事を爲すは常人にありては世間普通の狀態あるなり。苟も人と呼ばるべきの價値あるものは仕事を好み且是を爲すに堪ふるものならざる可からず。總ての人皆忙はしく働けるにいかで我れのみ怠惰あるべけんや。怠惰なるものいかで能く社會の尊敬と體面と責任とを持續して永久に是を失はざることを得ん、勞働は最良の新